不明)〔松野〕

●慣習と法律　穂積　陳重著

慣習は同式行爲の經時的反覆に成る規範にしてその主觀的原因は適應意識であり客觀的原因は同一境遇に在る者に對する同一の刺戟である。その成立には行爲者及承認者の二當事者を必要とし而も兩者は共に多數でなければならず且時間的に繼續するを要するその原始社會に於ける效果は數同意識を鞏固にし秩序的生活の習性を養ひ服從の習性を育てるが大體靜的勢力であつて社會の組成期には有利なれども發展期には有害なりとせねばならぬ慣習か法性を享受する順序を考ふるに第一期は法律が慣習の中に潛在し第二期には兩者の竝存あり第三期に至つて法效を有するに至るものである。而して所謂慣習法は國家的統制力として法律的規範たる性質を獲得せる慣習である。卽ち慣習の法律享受は公權力の添加によるものにして法慣習の常慣習に異なる點はその制裁の主格が國家の公權力であつて慣行者の共同的相互的制裁に非る點であるとするのが略その大意であらう。附錄として法信說批評及原力論斷片を加へて居る。

これは直に歷史的著作ではない、然しながら著者も引用する如くベーコンは「慣習は人生の主宰吏なり」と云つて居る、吾人の生活の大部分は慣習に從ふことを思ふ時それが歷史に於ていかに重大なる作用をなせるかに想到せざるを得ない。歷史を以て發展の學なりとする時保守的勢力である慣習は常に超克さるべき運命の下にあつたものではあるが兩者は一種の對立概念を爲すが故に發展の偉大さを量るものは又慣習であつたといはれぬこともない。固り著者の論ぜる所はかくの如き廣汎なる意味に於てゞはなく主として法律關係の中にいはゞ法源論としてこれを論じたものではあるが讀過中大に慣習の文化的考察を示唆し刺戟するものありその意味に於て甚だ好著たるを信じたのである。(菊版二六五頁、東京岩波書店發行價二、五〇)〔肥後〕

●加賀藩史料　第一編

舊加賀藩の前田氏は其の領土の廣大と易封轉城が無かつた事に於て他に比類すべき侯伯少く、藩祖利家以來今

日に至るまで世を累ねること十四代、年を經ること二百八十餘年に及んでゐる。此の大藩主家の家史編纂事業は明治三年慶寧氏が家錄方を邸内に置いて廣く舊領内に史料を採訪せしめたに初まり、其後同氏の易簀により一時中止したが、同十六年利嗣氏が再び邸内に編纂方の一局を設けて家史の調査編纂を行はしめ、かくて同三十二年に加賀藩史稾八卷を公刊し、爾來明治四十二年に加賀松雲公、松雲公小傳、大正三年に瑞龍公世家、同六年に芳春夫人小傳、同十年に淳正公家傳、同十一年に天德夫人小傳等を相續いで刊行した。併し加賀藩の終始を一貫する史藉の編輯は未だ企てられなかつたのを此度同家囑託日置謙氏は同家從來の編纂方法を改め、史料其ものを年月の序次に從つて集成して之を世に發表されることゝなつた。本書は其の第一卷で、前田利家の誕生した天文七年より慶長十年までの史料を收めてあつて、利家が織田信長に從つて戰功を積み次第に封地を增加した事、信長の薨後豐臣秀吉に從つて其の覇業を助け、又德川家康と好を修め、子利長其の遺業を繼いで、よく德川氏等に對し、又領内の民政に力を盡した事が知られる。第二卷以下が次第に刊行され、加賀藩並に前田家に關するあらゆる史料が發表されたならば學界を益すること蓋し鮮少でなからう。（菊版九七五頁、東京石黑文吉發行、非賣品）

●世界地理行脚　寺田　貞次著

著者は地理學研究の爲め大正十三年より二ヶ年餘歐米に留學され、其間各國の地理學界の狀況を仔細に視察して其の見聞記を雜誌『地球』に寄稿されてゐたが、記事が長い爲め全部を揭載することが出來なかつたから茲に單行本として出版されることゝなつたのである。其の行脚は英獨佛を中心とし、伊太利、白耳義、和蘭、墺太利、チエツコースロバカイ、及び亞米利加等で、主として大學の地理部並に特殊な地學關係、地學協會を始め地圖製作所、圖書館、博物館等を視察されたので、其の記事は英吉利の地理學、佛蘭西の地學研究室、伊太利の地理學ゴータ、ウイン行、ペンク教授近況、四大地理學家遺跡、獨逸の地理學界、エキスカーション、北米合衆國の地理學界、地理教授法に就て、歐米並に我國地理學界、の十

二編より成り、各編更に細目に分つてあるが、其内、各大學の項では教室、研究室、閲覽室、製圖室等の配置及び室内の諸設備、教授助教授等の近狀、其の講義並びに學生の指導振り等を綿密に視察して夫を詳細に記述し、第十一編では英獨に於ける各教授の地理教授方法を紹介し、第十二編は全體の結論ともいふべきもので、研究室の設備の善いのは獨逸では伯林大學、ライプチヒ大學、佛蘭西では巴里大學、英國ではケンブリヂ大學であつて、各國の地學協會、博物館も地理的智識の養成と向上に貢献してゐる。歐洲に於て地理學界の賑かなのは一般の思想が世界的であるから從つて世界を研究の目的とする地理の發達を促し、其の隆盛を來したのである。亞米利加に於ては地理學が一方に於て極端に微々たる狀態であるに反し一方に於ては極端に盛であるのは夫が新開地で最初地理學を餘り重要視しなかつたのを現今覺醒し來つた爲である。我國に於ける地理學界の現況は未だ充分ではない。此の學の文科中に設置されてゐるのは歐洲の昔の時代か、北米の覺醒以前の狀態にあるものとしか考へられぬ。圖書館博物館は地理の研究に貢献する事が少く、研究室の設備も充分でない。地圖の利用も幼稚で、從つて地圖の出版も困難な狀態である云々と述べてある。本書は最近歐米地理學界の狀況を知らんとする人々に恰好の書で、新たなる留學者には見學の指針となり、又教室研究室を設備せんとする際の參考にもなるものである。（四六版二六三頁、東京古今書院發行、價一・八〇）〔以上松野〕

◎鷄龍山麓陶窯址調査報告

神田惣藏
野守健

朝鮮總督府昭和二年度古蹟調査報告の第一冊をなすものである。鷄龍山は忠淸南道公州郡に所在する無名の山であるが近年この山麓に多くの陶窯址が發見され簡素雄健にして雅味ある製品を夥しく出土せしめた爲に俄然世の視聽を惹くに至つたものである、本報告に於ては先づ陶窯址の所在地と現狀を見次いで發掘と出土品を述べ陶窯の構造と陶器の種類及發見陶器の年代を論じて居る。それによると陶窯の構造は所謂登窯にして隔壁によつて數室を區劃したるもの、陶器の種類に至つては三島手、